

〈研究ノート〉

ソーシャルワークにおける「場」の概念

—パールマンの「場」を出発点に—

井上 健朗

Abstract

パールマンはソーシャル・ケースワークの構成要素として「場 (place)」の概念を挙げている。以降、ソーシャルワークにおいて「場」の概念がどのように扱われたかを探求する目的で文献のレビューを行い「研究ノート」として取りまとめた。ソーシャルワークにおいて「場」に類似した概念として用いられている「状況」「環境」も取り上げ、加えて人文地理学や認知心理学、社会科学の知見から「人」と「場」の相互作用についての言説をレビューした。そこから、「場」の概念として、形状や空間などの「物理的存在」と文化的、社会的、個別的な「意味的存在」の大きく2つの要素を見出した。ソーシャルワークにおいては、「場」が受ける影響、「場」が与える影響、「人」と「場」の相互作用が重視され、パールマンが主張したように「場」を「力動的」なものとして捉える傾向がある。しかし「場」、特に物理的な環境が人の生活に与える影響についてはソーシャルワークの関心の中心ではなく周辺に置かれてきた可能性がある。

キーワード：ソーシャルワーク 場 相互作用

1. 関心の所在

パールマン(Helen H. Perlman, 1905-2004)の論文や著書が出版された時代は、社会福祉施設や社会福祉機関を中心として社会福祉実践が展開された時期であり、施設や機関がソーシャルワーク実践の「場」であったと考えられる。パールマンはソーシャル・ケースワークの構成要素として挙げた「4つのP」のうち、「場 (place)」とは、社会福祉活動が実践される機関や施設のことでありとしている。慈善組織協会(COS)の活動やセツルメントなど地域をフィールドとしていた時代から、専門化した社会福祉機関での実践による発展の時代を経て、現代ではノーマライゼーション、ジェネラリストなどの理念が広がり、再び、社会福祉の実践の場は地域へと主軸がシフトしたように見える。もちろん、レジデンシャル・ケアを提供する施設などでの社会福祉実践、あるいはスペシャリストとしての実践は今も重要であるが、それでも地域、コミュニティと切り離して考える実践ではなくなっている。そして、方法論としての「ケースワーク」は単体としては語られなくなり、「グループワーク」「コミュニティワーク」と統合されたソーシャルワークとして取り扱われるようになった。今の時代においてソーシャルワークは、「場」もしくは「場所」をどのように捉えているのかということが本論の探求の動機である。本稿では、パールマンの「場 (place)」についての考え方を出発点として、ソーシャルワークにおける「場」の概念について探求を試みたい。

2. 「場」もしくは「場所」の意味

「場 (place)」の定義もしくは「場所の意味」については、人文地理学の分野で議論されてきた。ジョーダンとドモシュ (Jordan&Domosh : 1999) は「場所」について「主観、個性記述、人文主義、文化に関心を向ける地理学が、科学の諸原理を不備のあるもの、無意識にバイアスがかけられたもの、として退けながら、個々の地域や場所の特異性を理解するために使う用語」と定義している。また同じ分野においてゲスラー (Gesler :1992) は「場所の意味」について「個人とグループが場所に付与する意味、意図、主観的価値、重要性」と定義し、「場所」が意味と結びついていることを主張した。人々の生活は様々なあり方で暮らしている「場所」と結びついている。「空間と場所」について、カービー (Kirby,K : 1996) は、日常の暮らしを通して、「空間」は「場所」に変容され、時を経て、場所は記憶、イメージ、象徴的な意味を生ずるにつれて「場所は個人とコミュニティの一部となる」と述べている。このような人文地理学の指摘からは「場所」は単なる「空間」ではなく、人々の生活と密接につながっており、その相互作用によって意味を生じさせている存在であることがわかる。また、リン・ステーリ (Lynn A.Staeheli : 2003) は場所の定義を吟味する際に、①物理的な位置としての場所、②文化的小および社会的な位置としての場所、③コンテクスト (文脈) としての場所、④社会的に構築されたものとしての場所、⑤社会的過程としての場所の5つの領域に分けた。そしてこの定義を進める考え方として、空間科学の方法を利用する者は、「場所」について物理的な位置として概念化する傾向にあり、場所の接続性 (connectivity) や社会構築性を強調する立場を取る場合は、構造と人間の行為の相互関係を通して社会が構築される考え方を採用しているという「場所」についての捉え方の2つ枠組みを導き出している。

3. パールマンによる「場」

パールマンは「場」についてケースワークが実際に行われる場所、すなわち援助を行う組織や機関が「場」であると説明している。直接的には「社会事業施設、あるいは他の種類の福祉機関の事業部である」(Perlman : 1957 p 5) と述べている。このように機関の機能をケースワークの要素として、重視する立場は、折衷主義と言われるパールマンのケースワーク論において、機能主義の考え方を引き継いだものとされる。さらにパールマンは、「場」についての説明の中で、ソーシャルワーカーが所属する「機関の目的によって、社会資源とコミュニティの結びつきが決まってくることは注目すべきことである。加えて、機関の目的は、その機能、サービス、その機関の権限に対する社会的関心が範囲を限定することも注目すべきことである」(Perlman : 1970, p 150) と述べ、「場」が個別の実践へ与える影響、「場」が地域コミュニティから受ける影響について説明している。パールマンは援助の展開において、その構成物として影響を与える諸々の要素に関心を持ち、その構成要素の一つとして「場」を捉えていたことがわかる。

このように、パールマンは「場」とは、福祉施設や機関を指しているとしているが、「場」と「そこで展開する援助」が受ける影響についても考察を広げている。公的な施設や機関は、法律的枠組み、権利や条件、政治的風潮や市民の声、そしてその施設や機関を維持するものなどが「その施設の援助の範囲や限度を決めている」(Perlman :1957,p50) とし、これをパールマンは「施設を維持するものよりどころ」と呼んでいる。パールマンは「場」

と表現した社会福祉施設・機関について「(その地域コミュニティにおける社会福祉に関する) ある社会の意志を、あるいはその社会のなかにあるグループの意志を表現するために形成された一機関である」(Perlman:1957,p53) と表現している。つまり、社会福祉の機関や施設は、その地域において、生活困窮などの社会的サービスを必要としている人々をこのような形で保護し支援していくべきという社会や集団の声を具体化したものとして存在していることを強調する。それらの意志が認められ、その範囲での目的達成のために社会の関心と財政的な同意と支持が動員されて社会福祉実践の仕組みが組織化されていく。そしてその維持のためには、コミュニティがその価値を認め続けていくことが求められるとしている。

パールマンは施設や機関を政策の具現化された結果としての場、手続きや機関の機能が具体化された場として、静的 (static) にのみ捉えるのではなく、様々な要素のなかで変化する場として力動的 (dynamic) に捉えるべきであると主張する。さらに社会福祉施設に雇用された専門職 (ソーシャルワーカー) への提言として、その施設の諸目的を遂行し、その社会的価値を前進させることをすると共に「彼 (ソーシャルワーカー) は、施設がその職員や理事にのみでなく、その施設の存在を積極的にあるいは暗々裏に支持し進展せしめているコミュニティに属していることを知っていなければならない」(Perlman:1957 p 54) と述べ、クライアントに対しても「この援助はコミュニティの関心と意志の表れ」であることを伝えるべきだとしている。

パールマンは著書の中で「場」としての社会福祉施設、機関は、人々の生活の中にあるニーズを満たすためにコミュニティの関心から作られていると繰り返し強調している。この言及についてのもう一方の意図には、ソーシャルワーク専門職の価値や倫理としての所属機関との向き合い方という点も綴られており、これも重要な視点であるが本稿では割愛する。

蛇足だが、著書「ソーシャル・ケースワーク問題解決の過程」において、ケースワークの構成要素「4つのP」の説明のなかでも「場 (Place)」についての記述は極端に少ない。また1970年に書かれた論文においても、「すべてのケースワーク・モデルはこれらの条件と理解のなかで行うものであるから(個人開業の実践で起こる特殊なものは別にする) 問題解決モデルの一部としての「場所」についてはこれ以上述べないこととする」(Perlman:1970,p150) として論文の中でも短い記述にとどまっている。

4. 「場」・「状況」・「環境」

パールマン以降「場 (Place)」の概念を使って論を展開するソーシャルワーク論は少ない。我が国においては、村上の論文(村上:2016)、空閑の著書(空閑:2014)などに「場」もしくは「場所」を重要視した援助論の展開を見ることができる(後述)。前述のようにパールマンは「場」については、一義的には施設・機関のこととして扱っている。施設・機関についての福祉的観点からの実践論としては、ソーシャル・アドミニストレーション(運営論)の体系があるが、ここでは対人援助論としての「場」の概念を関心とするため取り扱わないこととした。ソーシャルワーク論において、パールマンが力動的なものとして取り扱おうとしたケースワーク論における「場」の概念に近く、一般的に考えられる「場」の概念に近いものは「状況」と「環境」ではないだろうか。

4-1 「状況」

ソーシャルワークにおいて「状況 (situation)」という言葉を使用したのはホリス (Florence Hollis, 1907-1987) である。ホリスは自身が開発したケースワークの方法論である心理社会的アプローチにおいて「人と状況の全体的関連性についての反省的話し合い」、「状況の中の人 (person in the situation)」という言葉のアプローチの主要概念として説明している。(Hollis:1964) ホリスは、ケースワークを「人」、「状況」、「両者の相互作用」の3つの要素の絡み合いからなる「状況の中の人」への援助とし、ソーシャルワークの方法として「状況」をとらえる視点を重視した。しかし、ホリスからは「ケースワークは、クライアントを彼の状況と状況の中におけるクライアント自身の機能遂行についての反省的考察に参加させることを強調する」(Hollis:1964) と説明したものの「状況」の概念そのものについてはあまり詳細な説明はなされていない。ホリスによれば、「状況」とは「人と条件と出来事」であり、「人と状況の全体的関連性についての反省的な話し合い」においては、①クライアントの現在の状況、②クライアントの自身の反応、③クライアントの内面的な応答、④関係の取り扱いの4つが捉えるべきこととされている。これらの記述からは、本稿の探索動機であるソーシャルワークにおける「場」の概念に結びつく記述はつかみきれない。この時点でホリスが「状況」という言葉にどのような意味を乗せていたかは定かではないが、1970年の論文では、「人」、「状況」、「両者の相互作用」の3つの要素については、「人」「彼の社会的・対人的環境」「それらの相互交換を変容するために診断的に方向付けられている過程」と書き換えられている (Hollis:1970)。またケースワークが関心を向ける対象としての「状況の中の人」は「状況の中の人」のゲシュタルト (the person in situation gestalt) もしくは「状況との相互作用の中における人 (a person in his situation with his situation)」と変化し、これは心理社会的アプローチがシステム理論の立場をとるようになったからだとその変化を解説している。

4-2 「環境」

慈善組織協会 (COS) の友愛訪問の活動からケースワークを体系化したリッチモンド (Mary E. Richmond, 1861-1928) は、ケースワークを「人間と社会環境との間を個別に、意識的に調整することを通してパーソナリティを発達させる諸過程から成り立っている」(Richmond:1922, 小松:1991) と定義している。この時代からソーシャルワークは「環境」という言葉を使用していた。その後ソーシャルワークの科学化、発展のなかで、人か環境 (社会) かの対象をめぐる議論に発展する。そして、このソーシャルワークの働きかけの対象の二元論の克服をソーシャルワークの世界では、生態学やシステム論の導入によって行ったとされる。

「人と環境の相互作用」の用語、特に2000年の国際ソーシャルワーカー連盟のソーシャルワーク定義にある「人びとがその環境と相互に影響し合う接点」に介入することこそがソーシャルワークであるとする考え方が多く用いられるようになった。この「環境」という言葉がソーシャルワークへ再導入されることに大きく貢献したのはカレル・ジャーメイン (Germain, C, B) である。ジャーメインは、生態学を援用しつつ、「環境」を物理的、文化的、社会的な側面を持つものとして定義している (Germain: 1979 p 13)。さらにジャーメインは、この物理的環境と社会的環境について、時間と空間の折り合いの産物であ

ると表現している。ジャーメインは、ソーシャルワーク論の捉える「環境」の中で物理的環境を見落とすことなく、さらに「空間」と「時間」という用語を用いて「環境」の持つ多様な側面と力動性を持論に織り込んでいる。物理的環境 = 「場所」として考えるか、意味や相互作用も含む力動的な概念としての「場」を「環境」の一側面として捉えるかについては引き続き検討を続ける必要がある。

システム論を用いた分析を展開したことで知られるピンカスとミナハン (Allen Pincus & Ann Minahan) は「環境」について、「物理的環境」と「社会的環境」と分け、「物理的環境」を「人々が相互作用しあう場の物理的属性」、「社会的環境」を「人々の相互作用を操作するアクション・システム (社会資源) の活用や、活動への参加、または規範・規則から成り立っている構成物」と説明した。さらに、人間の行動や態度について、「社会的環境」や「物理的環境」の性質によって直接的な影響を受けるという考え方を示した (Pincus & Minahan 1973)。

ケンプ、ウイタカー、トレーシーらは『人・環境のソーシャルワーク実践-対人援助の社会生態学』の中で「場所の政治」という用語について言及している (Kemp, Whittaker, Tracy :1997)。

ケンプらは、地理学者の Harvey の指摘を引いて、社会的に構成された分割から生まれる空間的不平等、境界線を引かれたコミュニティ、その例として米国の郊外に作られる裕福な飛び地 (enclave) の存在に着目し、例示している。この隔絶された富裕層の飛び地の存在は、社会に対立を強め、他のグループとの相互作用の機会を最小限にとどめる意識に繋がり、このような空間的分割が「他者性」と不利な状況にある人びとを周辺に置くことを強めたと指摘している。しかし、彼らがこの例示を著書に組み込んだのは、このような地理的、空間的「場所」からの影響が、人・環境の關係に大きな作用をもたらすことを重要な要素としながらも、環境からの影響による決定論が、主体としての人間を凌駕したり、否定したりすることが無いように配慮しなければならないことをソーシャルワーカーらに伝える意図からであった。

いずれにしても著書の中でケンプらは、「場所」の意味はソーシャルワークにとって重要な概念であり、知覚された環境、環境からのストレスに対する人の反応の連鎖は、人の行動や信念の形成に大きな影響をもたらすことを指摘している。(Kenp ら : 1997/横山ら 2000 : P67) しかし、それと同時に、人びとは住んでいる環境における主体者であることを強調するのである。ケンプらは、人が環境への変革をもたらす可能性、環境が変化する可能性を強調することはエンパワーメントの視点に合致するとの見解をとっている。

5. 日本における「場」とソーシャルワーク

日本においてソーシャルワークと環境の關係性について、さらに環境のなかでも特に「物理的環境」に着目して述べているのは村上である (村上 : 2016)。村上は、日常生活の中に埋没している側面がある自然環境、物理的環境についてはソーシャルワークの第一の関心から外される傾向にあることをケンプの論文を引いて強調している。ケンプは、ソーシャルワークは「実際の環境への関心から、クライアントによって描き出された環境、援助關係の力動の中で表された環境と言った比喩的な環境に対する関心へと変化した」 (Kemp:1997) と述べている。この「実際の環境」とは物理的、空間的な環境を意味する

と捉えることができるであろう。そしてこれを追認する論者として Zapf (Zapf : 2009) を挙げ、ソーシャルワークにおける人と環境の相互作用の議論は、ソーシャルワークの独自性や存在意義を示すことに繋がった反面、その議論が人間中心に偏っており、特に自然環境、物理的環境を周辺に追いやってきたとする意見を伝えている。村上は、この論文で、ソーシャルワーク論の中で、周辺に追いやられてきた自然環境や物理的環境の要素を再びソーシャルワークに組み入れていく必要性について論じている。(村上 : 2016)

この論文の中で、村上は自然環境、物理的環境と福祉的課題の相互作用の例として、徳島県のある地域を対象とした自殺の予防因子についての研究を挙げている。(岡壇 : 2011 73-96) この研究では、自殺率に影響を与えた因子として「可住地傾斜度」「人口密度」「日照時間」などの関与が高い結果を得たことから、自殺希少地域(自殺の発生率が低い地域)には「傾斜の弱い平坦な土地で、コミュニティが密集し、気候の温暖な海沿いの地域」が多いとしている。このことから村上は、地理的、自然環境、すなわち「場」は、単に人のいる場所としての静的 (static) なものではなく、人の生活や思考や行動にまで影響を与え合う、力動的 (dynamic) なものとして捉え直す必要があることを示唆している。

村上は、ソーシャルワークにおける環境の概念のなかで「自然環境は、『場所』ごとに固有の姿を帯びて立ち現れるので『場所 (Place)』という概念を用いることを提案しておく」とし、『場所』について「人間と自然環境の交互作用を成立させる基盤であり、相互作用が織りなされてきた歴史や文化が蓄積される場所」(村上 : 2016, p 50) と定義している。

空閑 (2014) は「ソーシャルワークにおける『生活の場モデル』の構築」を発表している。この著書の中で、提案するソーシャルワーク・モデルの基本概念として、日本人と場の文化について述べてられている。

空閑は、西洋で生まれたソーシャルワークの準拠枠としての個 (individual) の概念は、日本のソーシャルワークがよって立つ準拠枠としてなじまない部分があるのではないかとの問いを立て、「日本の個人は『社会』というよりむしろ『世間』を自らの日常生活の『場』として他者との間柄を重視する『間 (あわい) の文化』のなかで日常生活を営んでいる」という日本独自の準拠枠を提示した。つまり、日本人は「個」の判断基準よりも「場」を構成する周囲の人々の影響をより受けている文化を持つと仮説するのである。そのため、こうした「場の文化」を基底とする日本人の文化を踏まえたソーシャルワークの在り方が検討されなければならないと主張している。

空閑の言う「場」への視座を基盤としたソーシャルワークとは、どのようなものであろうか。その一つが「場の喪失」への対応である。人が自らの個性や自分らしさが発揮でき、行為主体や生活主体となれるような他者との関係を持つ居場所、生活空間や機会の喪失に焦点をあてた支援であるという。空閑は自らが提唱するソーシャルワークの「生活場モデル (Life Field Model)」とは「人の『存在感覚』が社会的に支えられ、かつ『存在論的安心』がもたらされる、『つながり』それが織りなす『場』の構築が、援助者がかかわることによって可能になるという生活支援のあり方」、そして「その『場』で体験される『つながり』の豊かさが人々の生活の豊かさをもたらすという生活支援のあり方」(空閑:2014,p137) であるとしている。人々が生活する「場」が持つ「力」に着目し、それを活用しようとするソーシャルワークを意味している。

6. 「場」(空間)からの影響-アフォーダンス

空間などの物理的な形状から、人や動物が受ける影響についてアフォーダンスという概念が提唱されている。これは私たちが環境を捉えるときに、無意識的に行動を促進させたり、制限させたりするような特徴を読みとっているとする性質のことで、認知心理学者のギブソン(Gibson:1904-1979)は、これを「アフォーダンス(affordance)」と名付けている。近年は工業デザインの分野などに応用され、ドアノブや調理器具、そしてパソコンやスマートフォンなどのグラフィカル・インターフェイスなどの製品開発などにおいて、使用者が説明を受けなくてもその形状を視覚的に捉えた時に、無意識、感覚的にその用法が理解できる工業デザインが研究開発されている。

ギブソンは著書において「陸地の表面がほぼ水平であり、平坦で、十分な広がりを持っていて、その材質が固いと判断されたならば、その表面は、我々の体を支えることをアフォード (afford) する。」と例示している。(Gibson : 1979)

人は物や環境から得た知覚情報に対して、「解釈」や「説明」などの何らかの情報処理を行ってその意味を理解するという従来の情報処理モデルに対して、人は「物や環境から直接的に意味を理解する」ことが可能、あるいは無意識に理解してきたとするギブソンの主張は、人びとの行動や生活が「場」から受ける影響を考える際に興味深い示唆となっている。ギブソンは、「場」ではなく「空間」という言葉を使っているが、人と場の関係性を検討するうえで興味深い分類を行っている。

ギブソンは、アフォーダンスの原型となった「空間の操作的意味」を、次の3つに分類している。ひとつは、人は空間や物体などの物理的形狀から得る情報(見た目)によって、掴むものなのか、押すものなのか、回すものなのかなどの「仮想の空間運動的意味」を直感的に把握するということ。二つ目に、人は、空間や物体などの物理的形狀から得る情報(見た目)によって、(これは)食べられる、(水など)触れば心地よいかも、(木陰は)入ると涼しいであろうなどの「仮想の利用、または必要に基づく意味」を直感的に捉えるということ。3つ目に、人は建物(建築物)をみれば(見た目によって)、その中に入れば身を守ることができるように見えるなどの「機械的意味」を直感的に把握するということ。

ギブソンの説は、人の認知機能はこのような特性を持っているということ、空間、物理的なものの形状、佇まいは意味を発している、人はその物理的な形状から意味をくみ取ることができる存在であることを主張している。

7. 場 (field) の理論

「場の理論」は物理学の領域でも使用される用語であるが、これを応用して、社会科学の立場からの「場の理論」を提唱したのはクルト・レヴィンである (Lewin, K : 1951)。クルト・レヴィンは、人の行動には、その人の特性と周囲の環境が関係しているという理論を提唱した。これは $B=f(P, E)$ の法則として表されるとしている。(B:Behavior 行動 f:関数 P:Personality 本人の特性 E:Environment 周囲の環境)すなわち、私たちの行動は「場 (field)」に影響を受ける。環境の重要性を強調し、人間の行動はその個人のパーソナリティと環境との間の相互作用によって決定されるとし、その関数関係を明らかにしたものである。クルト・レヴィンは、物理学における「場 (field)」の概念を取り入れ、そこから、行動はその場に共存する要素全体から起こるものである、そしてこれらの共存する

要素には「動的な場」としての特性があるという2つの条件を想定した。つまり、人の行動が生まれる「場 (field)」とは全体が影響し合う動的なものである。という主張を生み出した。クルト・レビンが「場 (field)」という用語を用いたのは物理学からの影響に他ならない。

クルト・レビンがソーシャルワークに与えた影響については、グループワーク論の枠組みの中で語られることが多い。いわゆるグループ・ダイナミクス、集団力動のことであり、集団において人の行動や思考は集団から影響を受け、集団に対しても影響を与えるというような集団特性についての知見をソーシャルワークは彼から学んだとされている。(久保：2016)

7.1 「場」と人びとの生活の相互作用の例

ここで自然、物理環境としての「場」と人々の生活の相互作用、これが地域の福祉課題の解決のアクションに結びついた例を紹介したい。長崎市は、長崎県の南西部に位置する中核市である。地形的に、住宅地の多くは山の斜面を利用しており「階段の街」「坂の街」として有名である。この長崎市に「長崎斜面研究会」という団体がある。斜面研究会と言っても、土木関係の学会ではなく、斜面住宅地に暮らす高齢者や障害者を中心に、市民、専門家や団体などが集まって福祉のまちづくりを考え実行する団体である。この団体は、1997年10月に発足した非営利活動(NPO)法人である。「坂道に暮らす」という高齢者や身体に障害がある者にとっては、困難性の高い物理的環境である「坂道」という環境要素を共有し、共同体(コミュニティ)を形成している。

長崎のまちには「坂道」に触発された文化や人と人のつながりがあるとされる。この研究会には、「坂道」という自然、物理的環境を共有し、そこで暮らし、働く人々が集まっている。医学・保健・看護・リハビリテーション・福祉・機械・土木・建築・行政・研究者などの専門職そして坂道での暮らしに関心のある一般の市民が集まり、外出支援活動・生活環境改善の支援活動・研修活動・交流事業・広報活動・坂のまち体験・出前福祉講座など高齢者・障害者の生活支援活動に取り組んでいる。(長崎大学：2011)。坂道という一見苦々しい環境の中にあって、自身が生活している場の特性である「坂道」に対する愛着のような側面も見える。この活動からは、「斜面」という物理的環境は、生活の困難性を有する反面、「坂道文化」と言われる人々の意識やこの研究会のような共生的な感覚、特有の人々のつながりを作り出す役割も果たしていることが理解される。

8. まとめ

本稿において、「場」の概念を取り扱ったが、「場」と「場所」に相違について曖昧なまま取り扱ったこと、加えて英語表記の field と place の違いなどを原著の表記は確認したものの、この点も詳細に言及できなかったことは反省点である。今回の文献レビューでは、「場」の概念は、地形や気候など自然環境や物質の形状や建物や構造などの「物理的環境」の側面と人の生活の中で生成されてきた文化的、制度的、社会的、個別的な「意味的存在」の側面の2つの要素として扱われていた。またソーシャルワークが拠り所とする社会科学の知見では、「場」が受ける影響、「場」が与える影響、そして「人」と「場」の相互作用が取り上げられており、パールマンが主張したように「場」を「力動的」なものとして捉

える必要があることが理解された。「場」の持つ力をどのようにソーシャルワーク、対人援助に結びつけることができるかについてさらに探求を続けたい。

文献

Germain, C.B (1979) Introduction: Ecology and Social Work *Social Work practice: People and environments* p p .103-124 N.Y. Free Press

Gesler, M.M. (1992) Therapeutic Landscapes: Medical issues in light of the new cultural geography. *Social Science in Medicine* 34 735-746

Gibson, J.J. (1979) *The Ecological Approach to Visual Perception*, Boston: Houghton Mifflin, 1979. 古崎 敬訳 (1986) 『生態学的視覚論-ヒトの知覚世界を探る』サイエンス社、1

Hollis, H. (1964) *Casework ; A Psychosocial Therapy*, Random House NY F ホリス著 (1996) 黒川・本出・森野訳 「現代精神分析双書 6 ケースワーク：心理社会療法」岩崎学術出版社

Jordan-Bychkov, T and Domosh, M. (1999) *The Human Mosaic :A Thematic Introduction to Cultural Geography*, 8th edn. New York Longman. P535

Kemp, S.P. Whittaker, J.K. Tracy, E.M. (1997) *Person-Environment Practice The Social Ecology of Interpersonal Helping* Gruyter Inc. 横山・北島・久保・湯浅・石河訳 (2000) 『人-環境のソーシャルワーク実践-対人援助の社会生態学』川嶋書店

Kirby, K. (1996) *Indifferent boundaries: Spatial concepts of human subjectivity* New York Guilford

Lewin, K. (1951). *Field theory in social science: selected theoretical papers* クルト・レビン著 猪股 佐登留訳 (1979) 「社会科学における場の理論」誠信書房

Lynn A. Staeheli. (2003) Chapter 11 Place. J. Agnew, K. Mitchell, and G. Toal (eds) In *A Companion to Political Geography* pp. 158-170 本岡拓哉訳 (2006) 「場所と政治研究」『空間・社会・地理思想』大阪市立大学 大阪市立大学文学部地理学教室, 10号 127-137

Pincus, A., & Minahan, A. (1973). *Social Work Practice: Model and Method*. Itasca, IL: Peacock.

Perlman H.H. (1957), *Problem-solving Process* The University of Chicago press, 1957, 『ソーシャル・ケースワーク-問題解決の過程-』、松本武子訳、全国社会福祉協議会、1967

Perlman H.H. (1970) Problem solving model in social case work R.W.Roberts and R.H.Nee eds *Theories of Social Casework* University of Chicago Press 久保紘章訳 (1985) 「ソーシャル・ケースワークの理論-7つのアプローチとその比較1」 131-184 川嶋書店

Richmond.M.E (1922)What is Social Case Work An Introductory Description メアリー・E・リッチモンド著/小松源助訳(1991)『ソーシャル・ケース・ワークとは何か』 p.57

Zapf.M.K(2009)Social Work and the Environment : Understanding People and Place Canadian ScholarsPress.

岡壇 (2011)『日本の自殺希少地域における自殺予防因子の研究』慶應義塾大学大学院健康マネジメント研究科 博士論文集 73-96

空閑浩人 (2014)『ソーシャルワークにおける「生活場」モデルの構築-日本人の生活文化に根ざした社会福祉援助-』ミネルヴァ書房

久保美紀「第3章グループを活用した相談援助」『新社会福祉士養成講座8「相談援助の理論と方法Ⅱ第3版」社会福祉士養成講座編集委員会編集 中央法規 2016 p63

長崎大学 (2011)『地域と連携した「NPO 法人長崎斜面研究会」の取り組み』長崎大学生涯学習書8『大学の社会貢献2』91-172

長崎斜面研究会 URL <http://www.shamenken.jp/> (2022年10月31日確認)

村上信 (2016)「ソーシャルワークと環境」淑徳大学大学院研究紀要第23号 39-56

井上 健朗 (いのうえ けんろう) 東京通信大学 人間福祉学部 准教授